

主の道をまっすぐに

ヨハネの福音書 1章 19-28節

はじめに

月の第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話することになっています。今日の聖書箇所には、「バプテスマのヨハネ」について書かれています。つまり「バプテスマのヨハネ」とは何者なのか、ということです。「ヨハネの福音書」には、これまでも「バプテスマのヨハネ」について少し書かれていました。例えば 1：6-8 を見てみると、こうあります。「**神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである**」。また 1：15 にもこうありました。「**ヨハネはこの方について証しして、こう叫んだ。『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです**」。

バプテスマのヨハネは、イエス様を証しするために、イエス様より先に神様から遣わされた人でした。彼によってすべての人がイエス様を信じるためです。

今日の聖書箇所の 28 節を見ると、バプテスマのヨハネは、「**ヨルダンの川向こうのベタニア**」で、「**バプテスマを授けていた**」とあります。彼は人々に「バプテスマ」、つまり「洗礼」を授けていたからこそ、「バプテスマのヨハネ」と呼ばれるのです。彼が洗礼を授けていた所に、「**エルサレム**」から「**祭司たちとレビ人たち**」が遣わされて来て、ヨハネに色々質問するのです。そのことによって、バプテスマのヨハネとは何者なのか、またイエス様とはどんな方なのかということが少しずつ明らかになっていくというのが、今日の聖書箇所の内容です。

1. あなたはどなたですか

エルサレムから遣わされて来た祭司たちとレビ人たちは、ヨハネの所に来ると、まず「**あなたはどなたですか**」と尋ねます。するとヨハネは、「私はキリストではありません」と答えます。彼らは続けて、「**あなたはエリヤですか**」また「**あの預言者ですか**」と尋ねます。するとヨハネは、そのいずれも「違います」と答えます。

当時のユダヤ人たちは、「救い主」である「キリスト」を待ち望んでいました。また旧約聖書の最後の書物である「マラキ書」には、「**見よ。わたしは、主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす**」(マラキ 4:5)という預言がありました。そこでユダヤ人たちは、キリストが来られる前に、「預言者エリヤ」が現れると信じていたのです。ですからユダヤ人たちは、エリヤをも待ち望んでいました。

また旧約聖書の「申命記」には、神様がモーセに向かって、「**わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのような一人の預言者を起こして、彼の口にわたしのことを授ける。彼は**

わたしが命じることすべてを彼らに告げる」(申命記 18:18)と言われたとあります。そこでユダヤ人たちは、キリストが来られる前に「モーセのような預言者」が現れるとも信じていたのです。ですからユダヤ人たちは、「モーセのような預言者」を「あの預言者」と呼んで、待ち望んでいたのです。

バプテスマのヨハネは、多くのユダヤ人たちを集めて、悔い改めを説き、洗礼を授けていたので、人々は彼を「キリストではないか」「エリヤではないか」「あの預言者ではないか」と思ったのです。しかしヨハネ自身は、自分はそのどれでもないと否定するのです。

このやり取りで面白いのは、ヨハネは「あなたはどなたですか」と尋ねられた時、「私はキリストではありません」と答えているところです。「あなたはキリストですか」と尋ねられて、「私はキリストではありません」と答えたのではなく、「あなたはどなたですか」と尋ねられただけなのに、いきなり「私はキリストではありません」と答えているのです。私たちは、「あなたは誰ですか」と聞かれて、「私はキリストではありません」といきなり答えるでしょうか。私たちは、「あなたはキリストですか」と聞かれれば、「私はキリストではありません」と答えるでしょう。しかし「あなたは誰ですか」と聞かれただけなのに、「私はキリストではありません」と答えることは、まずないでしょう。

このことからヨハネは、「自分はキリストではない」という強い自覚を持っていたことが分かります。20 節に、「**ためらうことなく告白し、明言した**」とある通りです。「自分はキリストではない」ということは、「自分は救い主ではない」ということです。そして、「自分は救い主ではない」ということは、自分は人を救うことはできない、また自分さえも救うことができないということを意味しています。ヨハネは、自分は自分のことも人のことも救えない者であるという強い自覚があったのだと思います。

2. **主の道をまっすぐにせよ**

では、ヨハネという人は、キリストでも、エリヤでも、モーセのような預言者でもないのなら、一体何者なのでしょう。23 節を見てみましょう。「**ヨハネは言った、『私は、あの預言者イザヤが言った、【主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声】です』**」。

ヨハネは、自分のことを「主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声」だと認識しているのです。ヨハネの役割は、「主の道をまっすぐにすること」でした。つまりイエス様が来られる道を、まっすぐにすることだったのです。「まっすぐにする」という言葉は、「案内する」「導く」という意味の言葉です。ヨハネは、人々をイエス様のもとに案内し、導く役割を与えられた人であったのです。

ではヨハネは、具体的にどのように人々をイエス様のもとに案内し、導いたのでしょうか。それは、「悔い改め」を求めることを通してです。ヨハネは人々に、自分の罪を告白して悔い改めることを求め、悔い改める者に「洗礼」を授けたのです。

神様は、イエス様が公の宣教活動を始める前に、まずヨハネを人々のもとに遣わされ、人々に「悔い改め」を求められたのです。このことは、私たちはイエス様に出会う前に、ま

ず自分の罪を認めて、「悔い改める」ことが求められているということではないでしょうか。

私たちの教会の信仰基準である「ウェストミンスター小教理問答」には、「**罪のため私たちに当然な神の怒りとのおろいとを免れるために、神が私たちに求めておられる事は、キリストがあがないの祝福を私たちに伝えるのに用いられるすべての外的手段を、忠実に用いて、イエス・キリストを信じ、命に至る悔い改めをすることです**」(問 85)とあります。私たちが救われるために、神様から求められていることは、「信仰」と「悔い改め」なのです。私たちが救われるためには、「信仰」だけではなく、「悔い改め」が必要なのです。

では「悔い改め」とは何でしょうか。同じく私たちの教会の信仰基準である「ウェストミンスター信仰告白」には、「悔い改め」とは、「**自分の罪が危険なものであるだけでなく、それが神の聖なる性質とその正しい律法に反するものとして不潔で憎むべきものであることを見、また感じるにより、そして同時に、悔いる者に対するキリストにある神の憐れみを悟ることによって、自分の罪を深く悲しみ憎んで、それらすべての罪から神に立ち帰り、神の戒めのすべての道において、神とともに歩むことを決意し、そう努めるようになる**」(15:2)ことであるとあります。「悔い改め」とは、第一に、自分の罪を告白して、それを深く悲しんで憎むことです。そして第二に、その罪から離れて、これからは神様に従っていくことを堅く決心し、努力していくことです。つまりはっきりと罪と決別し、新しい歩みをすることです。罪に従っていく人生から、神様に従っていく人生へと明確に方向転換をすることです。その「悔い改め」が、私たちが救われるためには、イエス様への「信仰」と共に必要なことなのです。この「悔い改め」が曖昧だと、その後の信仰生活、クリスチャン生活も曖昧なものになってしまいます。

イエス様が公の宣教活動を始めるの前に、なぜバプテスマのヨハネが遣わされたのか、その意味を私たちは深く考えなければなりません。「主の道をまっすぐにする」とは、人々に「悔い改め」を求めることであつたのです。「悔い改め」は、私たちの救いにとって、また私たちの信仰生活にとって、必要不可欠なものなのです。

3. 私の後に来られる方

さて、エルサレムから遣わされて来た祭司たちとレビ人たちは、ヨハネがキリストでもなく、エリヤでもなく、モーセのような預言者でもないなら、なぜ「**バプテスマを授けているのですか**」と続けて尋ねます。するとヨハネは、26-27 節でこう答えます。「**私は水でバプテスマを授けていますが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。その方は私の後に来られる方で、私にはその方の履き物のひもを解く値打ちもありません**」。

ヨハネはここで、なぜ自分が洗礼を授けているのかを明確に答えていません。しかしイエス様のことを語ろうとしていることは分かります。1:31 でヨハネは、自分が洗礼を授けている理由について語っています。「**私に来て水でバプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです**」。ヨハネが人々に洗礼を授けているのは、人々にイエス様が明らかにされるためだと言うのです。そして 1:33 には、「**その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である**」とあります。ヨハネが水でバプテスマを授けていたのは、イエス様に依

る聖霊によるバプテスマを指し示すためであったのです。ヨハネは、水でしかバプテスマを授けることはできませんでした。しかしイエス様には、聖霊によってバプテスマを授け、人々に聖霊を与えることができたのです。

ヨハネは人々に「悔い改め」を求めました。「悔い改め」とは、自分の罪を告白して、それを深く悲しみ憎み、その罪から離れて神様に従っていく人生へと明確に方向転換をすることです。しかし私たちは、自分の力で神様に従っていくことができるのでしょうか。自分の力で新しい人生を歩むことができるのでしょうか。自分の力で、もう二度と罪の生活に戻らないと言えるのでしょうか。私たちは、自分の力で、神様に従っていくことも、新しい人生を歩むことも、罪の生活から離れることもできません。私たちには、「助け主」が必要なのです。私たちに絶えず罪を示し、私たちを新しく生まれ変わらせ、イエス様への信仰を与え、私たちを聖さに向けて造り変えてくださる「助け主」が必要なのです。その「助け主」こそ、「聖霊」なのです。

ヨハネには、「悔い改め」を求めることしかできませんでした。しかしイエス様には、「悔い改める」者への具体的な助けである「聖霊」を与えることができたのです。人々に「聖霊」を与えて、人々を救い、悔い改めた者に確実に新しい人生を与えることができるイエス様こそ、確かな「救い主」「キリスト」なのです。その意味でヨハネは、確かに「キリストではない」のです。そしてヨハネには、イエス様の「履き物のひもを解く値打ちもない」のです。

私たちが受ける「洗礼」は、父・子・聖霊の御名による「洗礼」です。「洗礼」の水は、イエス様の十字架で流された血と聖霊を表すのです。罪を悔い改め、イエス様を信じて「洗礼」を受けた私たちは、イエス様の十字架の血によって、すべての罪が洗い流され、私たちに助けてくださる「聖霊」が与えられているのです。私たちは、自分の力だけで神様に従っていく人生、新しい人生、罪から離れる生活をすることはできません。「聖霊」こそ、私たちに助けてくださるのです。クリスチャンの人生とは、聖霊に導かれる人生、聖霊に満たされて歩む人生なのです。

おわりに

今日の聖書箇所には、19節にあるように「**ヨハネの証し**」が書かれていました。ヨハネは、自分が何者であり、イエス様こそどういう方であるのかを語りました。「証し」とは、自分が何者であり、イエス様がどういう方であるのかを語ることでないでしょうか。ヨハネは、まず自分は「キリストではない」と言いました。それは、自分は自分のことも人のことも救えないと語ることでした。証しとは、まず自分の罪を認めて、自分では自分を救えないこと、自分には救いが必要であることを語ることです。そして第二に、証しとは、自分が何者であるかを語ることです。自分は、「悔い改め」て、イエス様を「信じる」クリスチャンであることを明確に語ることです。そして第三に、証しとは、イエス様がどういう方であるかを語ることです。イエス様こそ、私たちの罪を償うために十字架に架かり復活し、聖霊を与えて、私たちに新しい人生を与えて、助け導いてくださる「救い主」であることを語ることです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、生まれながらに罪の性質を持ち、罪に従う人生を歩んできました。その行き着く果ては、神様の怒りと呪いしかありませんでした。しかし神様は、この地上に、バプテスマのヨハネとイエス様を遣わし、私たちが救われるために、「悔い改め」と「信仰」が必要であることを示してくださいました。どうか私たちが、「悔い改め」を明確にし、新しい人生を歩む決意をすることができますように。またイエス様への「信仰」に生き、罪の赦しと「聖霊」の助けと導きによって、新しい人生を確実に歩むことができますように。

また私たちも、やがてこの地上に再び来られるイエス様のために、「主の道をまっすぐにする」ことができますように。そのために、私たちの「証し」を用いてください。

この祈りを私たちの救い主、イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。